

巻 頭 言

2020年初頭から始まったコロナ禍によって、私たちの生活は大きく変わりました。1年経過した現在でも、未だ収束の見通しが立っておらず、その影響はあらゆる分野に及んでいます。

愛媛大学も例外ではなく、さまざまな困難と課題に直面してきました。愛媛大学では、すべての学生の健康と安全を確保する責務を果たすため、前学期は対面授業の実施をできる限り控え、オンラインを活用した遠隔授業を全学的に実施することとしました。開講日を延期し準備期間を設けましたが、想定外の対応であったと考えます。多くの学生や教職員にとって本格的な遠隔授業は未知の経験であり、試行錯誤の連続でした。対面授業の再開を求める声もしばしば聞かれました。

そのため後学期では、学生の学びの「場」としてのキャンパスライフの提供に努めることを目標とし、感染防御対策を徹底しながら対面授業も可能な限り開講しました。しかし、冬にかけての全国的な感染の再拡大に伴い、一部の授業を除き遠隔授業による実施への変更を余儀なくされました。学生が従来のような大学生活を送ることができない現状を心から残念に思います。

一方、このような非常に困難な状況にあっても、学生の学びを止めないために大学の教職員が奮闘していたことは忘れてはなりません。満足のいく授業ができなかったと悔やむ教員もいるかもしれません。しかし、できなかったことを悔やむよりも、学びを止めないために創意工夫に努めてきた試みを前向きにとらえる姿勢を持ちたいものです。新生を対象としたアンケートからは、試行錯誤する教員の姿が学生の励みになっていたことがわかります。自分のペースで学習を進めることができた、動画や音声があると授業を受けている実感があつた、チャットによって教員に質問をしやすかったなどの遠隔授業に対する肯定的な意見も寄せられ、新しい形態の教育の可能性が少しずつ見えてきたといえます。

2003年3月に創刊された大学教育実践ジャーナルは、高等教育に関わる研究成果や実践事例の論文をまとめた雑誌です。今回収録されている論文の内容もコロナ禍の影響を受けていることがわかります。今年度の教職員の教育現場での苦闘や苦悩の跡を確認することができます。本誌は、未曾有の危機に対応した教職員の取り組みの記録として、これからの新しい教育をつくりあげる基盤となると確信しています。ぜひ多くの方に読んでいただければと思います。

今回原稿を寄せていただいたすべての執筆者および本誌の作成に関わったすべての教職員に感謝と敬意を表するとともに、今後の大学教育を牽引する活躍を期待いたします。

2021年3月

愛媛大学教育・学生支援機構長

弓削 俊洋